

春の暖かな日差しが感じられ、風が私たちを優しく送り出してくれるような季節の中、私たち六十二回生は駒場東邦を卒業します。今回の卒業式の開催に向け、様々な準備をして頂いたみなさんに、卒業生を代表し感謝申し上げます。

駒場東邦で過ごした六年間を振り返ると、たくさんの駒東生や先生方と共に生徒会の活動に取り組むことができました。一方、今まで表面化していなかった問題に直面することもありました。文化祭、体育祭、そして行政委員会などそれぞれの団体でより安定し継続的な活動を目指し、ルールの見直しが長期的に行われました。自分は多くの人が駒場東邦について、一度じっくりと考えるために立ち止まることは避けて通れないと考えていました。それでも、生徒会の活動を整理し分かりやすくするためにはたくさんの時間が必要でした。そんな時に、普段の活動を通じて同級生や後輩のみなさんが様々な意見を出してくれました。幅広い意見に触れる中で、今後の活動の土台を作ることができたと考えています。後輩のみなさんには、私たちの活動をそれぞれの立場から検証し活用して今後の活動の幅をさらに広げて行って欲しいと願っています。

また、先生方は多くの時間を使って、私たち一人一人の考えに向き合ってくださいました。生徒会の活動で分からないことがあれば、何度も聞きに行

きました。一日の全ての休み時間に、同じ先生の所へ相談しに行ったこともありましたが、それでも、先生方が丁寧に対応してくださり、自分にとって今取り組みたいことを明確にできました。部活や生徒会では顧問の先生のみならず、担任団の先生方や授業で教わる先生方にも応援していただけたことで、積極的に取り組めるようになりました。担当といった枠を超えて、多くの先生方と直接お話しすることで、様々なことに挑戦できたと思います。

六十二回生は同級生でありながら、自分にとって目標となる集団でした。自分がそんな学年のために努力したいと思ったのは、中学三年生の時の六十年周年記念式典がきっかけでした。その時駒場東邦の校内案内をする中で、旧校舎の時の卒業生とも交流できました。その時、先輩方が楽しそうに当時の学校生活を思い出されていたことが印象に残りました。初めは漠然と考えていただけでしたが、次第に六十二回生にもこの六年間の学校生活を楽しかったと思って欲しいと強く考えるようになりました。しかし、そう簡単に上手くいくこともなく、生徒会にとっての将来性を大事にしたい気持ちと同級生につらい思いをしてほしくないという気持ちがあつたことも増えました。それでも、修学旅行や文化祭、体育祭といった行事で、困難なこと全員で楽しく乗り越えていく様子に励まされ、自分の取り組むべきことに向き合えました。ただ、自分の生徒会での活動は必ずしも六十二回生にとってプラスに働かなかつたかもしれません。迷惑をかけることもたくさんありました。

そんな自分のことを受け入れてくれた同級生には本当に感謝しています。  
六十二回生それぞれが六年間の駒東生活の中で何か一つでも楽しかったと思えることがあるのなら、すごくうれしく思います。

保護者のみなさまには、六年間私たちの駒場東邦での学校生活を見守っていただきありがとうございます。学年が上がり様々な行事を経験するたびに、私たちの見えないところで多くの準備や応援をしてくださる保護者のみなさまの存在の大きさを実感するようになりました。また、部活ではたくさんの方に試合の応援をして頂き、とても励みになりました。私たち六十二回生は全員が次のステップに向かって進んでいきます。また、在校生も厳しい情勢の中、何とかやれることに取り組みたいと懸命に努力しています。今後とも六十二回生、そして駒場東邦の活動を暖かく見守り続けていただければと思います。

駒場東邦での六年間、関わっていただいたすべてのみなさまへ深く感謝申し上げます。ありがとうございます。

令和三年三月六日 卒業生代表 野村遥